

大正大震災大火災

だい にっ ぽん ゆう べん かい
(大日本雄辯會・講談社)

本書は大正 12 (1923) 年 9 月 1 日に起こった関東大震災についての記述です。

大震・大火災

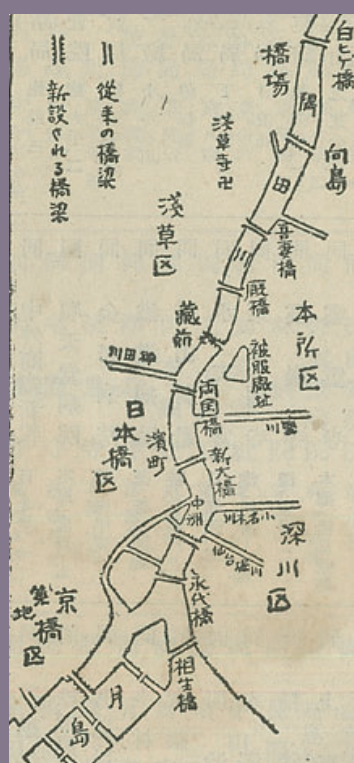
午前11時58分に発生した大きな揺れ以降、3日間で1700回もの余震を記録しました。「大震と大火！真に筆舌を絶する大災害であつた。」とあるように、お昼時であったため、多くの家庭が火を扱っており火災の影響が大きく、市内76ヶ所から猛火は燃え上がり、東京市の大部分を焦土させました。



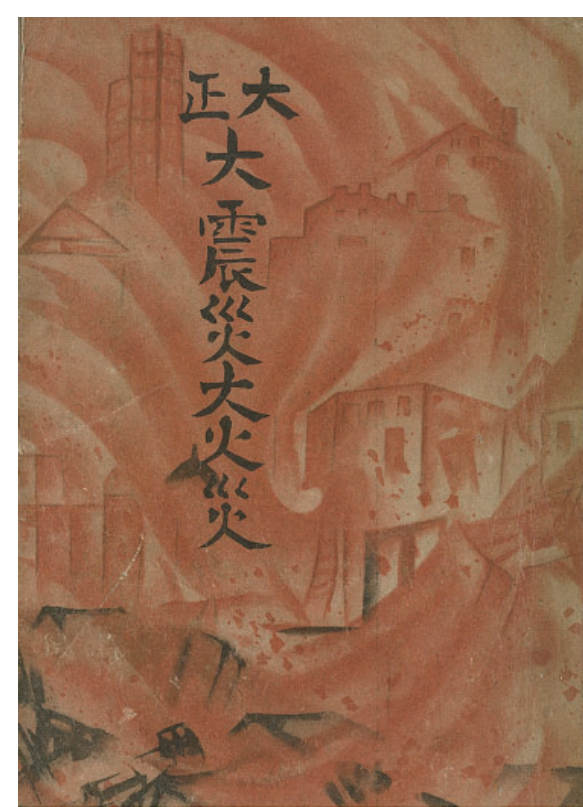
震災後の東京の様子



職業紹介所に押しかけてきている様子



隅田川の橋の新設の図



大正12(1923)年10月1日発行

震災が生んだ新商売

震災後多くの人々が職業を失い、職業紹介所に押しかけました。新しい商売もありました。その一つが金庫破りで、焼跡の大道を、鉄棒金槌大金錠などの七つ道具を肩に、「金庫破り」の旗を持ちながら横行し、残された金庫を破る請負をしていたのです。また、一時的に現れた職業もありました。震災で亡くなった多くの方を運ぶ「死体運搬の人夫」です。給与は、被害の大きかった横浜では五圓と米一升、東京では四圓ほどでありました。

復活する大東京

大震災で東京は殆ど全滅し、大きな被害を被ったという報道が世界に伝わると、各国は支援金を募り、国際

連盟会議では、国際連盟に対する日本の負担額の軽減を可決するなど手厚い支援を行いました。東京復興のための20億円、15年計画が出来上がりました。橋の不足が悲惨事を生んだので、橋の新設や道路に燃えやすい木製のものを使用しないことなど、震災に鑑みて計画が立てられました。

